

# 出 会 以 (23)

—— キリスト教講演会・講話集 ——

2012年度



**桃山学院大学**

キリスト教センター

桃山学院の「キリスト教精神」

## 「自由と愛の精神」

桃山学院の学院章には、“SEQUIMINI ME”（我に従え）という言葉が刻まれています。それはイエスの弟子アンデレがイエスに従ったように、「自由と愛の精神」をもっていきることです。使徒パウロが書いています。「あなた方は、自由を得るために召しだされたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。」（ガラテヤの信徒の手紙 5 章 13 節）

自由には他者への愛と責任がともないます。「自由」とはひとりの人格と主体性を尊重すること、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きることです。この「自由と愛の精神」は、単にキリスト教の立場だけでなく、すべての人間が一致しうる普遍的な理念であり、人類共通の目標です。

人間のそのような可能性を開花させながら、高い理想をめざしてチャレンジし続けていくこと、それこそが桃山学院の一世紀を超える伝統が目指そうとする「キリスト教精神」であり、「世界の市民」への道なのです。

# 目 次

## 第 1 回キリスト教講演会（2012 年 6 月 15 日 金曜日）

講演テーマ：「セクシャル・マイノリティとキリスト教」

講 師：

日本聖公会中部教区司祭・名古屋聖ヨハネ教会牧師、  
愛知聖ルカ教会管理牧師牧師

アンブロージア 後藤 香織 師 …………… 1

## 第 2 回キリスト教講演会（2012 年 11 月 2 日 金曜日）

講演テーマ：「桃山学院大学の建学のルーツ：  
聖公会が大切にしてきたもの」

講 師：立教大学・副総長・文学部教授

西原 廉太 師 …………… 17



# 「セクシュアル・マイノリティとキリスト教」

アンブロジーア 後藤 香織

## はじめに

まず、自己紹介をさせていただきます。わたしは、日本聖公会という桃山学院大学の母体でもある英国教会の流れを汲むキリスト教会の司祭をしています。教会の職位では、1995年4月執事の職位に按手。1996年11月司祭に按手されています。日本聖公会初の女性の司祭が誕生したのは、1998年12月12日のことですので、わたしはその2年前に司祭になっています。現在は、日本聖公会中部教区（新潟、長野、岐阜、愛知）の名古屋聖ヨハネ教会牧師と、愛知聖ルカ教会の管理牧師です。

後藤香織という名前は、戸籍名ですが、生まれたときは全く別の名前でした。婚姻などにより姓が変わる人は、少なからずいらっしゃるかと思います。わたしは姓も名も現在の名前と、生まれたときの名前とは違うのです。姓が変わったのは、母方の家を継ぐために祖母の養子となったために変わったのですが、名は2005年家庭裁判所に「名の変更許可申立」をして、調査審理を経て、同年10月に審判があり変更したものです。

名を変える申立をしたのは、わたしがMtFTG（\*1）だからです。わたしは、男性として生を受け、40年近く男性として生活をしてき

ました。小さいときから、女の子の持ち物を持ちたいと思ったり、お化粧をしたり、女の子の服を身につけたいという、いわゆる「女装癖」がありました。

(\* 1) MtFTG

- ・TG：トランスジェンダー～最広義では、生物学的性別、それに基づき生まれながらに社会的、法律的に割り当てられた性別を越境する人。
- ・MtF：Male to Female トランスジェンダーの中で、生物学的に男性でありながら、社会的に女性である者。

幼稚園や小学校の低学年のうち、わたしが多少、女の子のように振る舞っても、友達と一緒に仲間に入れてくれました。例えば、小さいとき良く仮面ライダーごっこに交ざって遊びましたが、わたしの役は、仮面ライダー本郷猛が立ち寄る、喫茶店「アミーゴ」のお姉さん役でした。しかし、小学校高学年にもなると、「男のくせに」とか「お前オカマじゃないの」と言われるようになります。そう言われないように、男らしく振る舞おうと思いましたが、当時は何が男らしさなのか、よく分からず、粗野な言葉遣い、乱暴な振る舞いをすることで、男らしくあろうと試みます。好んでそんな振る舞いをするわけではありませんでしたので、そんな自分には嫌悪感を覚えながらの毎日でした。

小学生の頃は、妹の服を借りて着てみるぐらいでしたが、中学生、高校生になると、お小遣いで化粧道具や女の子の服を購入するようになります。自分が、生物学的には男性であることは自覚していました

ので、「女装」をすることは、おかしいことであると、自分でも思っていました。母親にも、何度か「女装」をしているのを見つかり、「変なことはやめなさい」と叱られもしました。ですから、何度も何度も、おかしいことである「女装」をするのをやめようと思いました。

折角買ってきた化粧品や洋服を捨てては、「もう2度としない」と心に誓うのですが、しばらくすると、また「女装」をしたくなりました。お化粧品をして、ワンピースを身につけると、心が安らぎます。しかし、ワンピースを脱いで、お化粧品をおとしたときに、また変なことをしてしまったという罪悪感にさいなまれます。

男らしく振る舞う自分に嫌悪感を抱き、「女装」を我慢できないことに罪悪感を覚え、自己肯定感を持つことは出来ずに、後ろめたさの中で青年期を過ごします。それでも男の身体へ嫌悪感は強くはないこと、またどこか脳天気な性格のおかげでしょうか。何とか気持ちを誤魔化しながら暮らすことが出来たのは、幸いなことでした。

高校は、東北学院榴ヶ岡高校というミッション・スクールの男子校でした。夏休みの宿題で訪ねた教会は、それなりに居心地が良く、何となく教会に通うようになります。

初めのうちは冷やかしか半分、居心地の良さ半分で行っていたのですが、「女装」への罪悪感、キリスト教の教義、神学への興味にわたしを導くことになります。

イエス・キリストは、わたしたち一人一人を愛して下さり、自らの生命をかけ、十字架につかれ、全人類の罪をその身に負って、人間の罪を贖ってくださったこと。イエス・キリストの復活の出来事は、人間を新しい歩みへ導き、新たに命を与えてくれるものであるというキリスト教の教えは、わたしの中の嫌悪感、罪悪感を取り払ってくれる

ものでした。男なのに女として振る舞いたいという変な思いを持ち、隠れてこそこそと「女装」をしているというわたしの後ろめたさ、罪悪感。そんなわたしのためにイエス・キリストは死んでくださったのだという喜び、罪悪感からの解放は、わたしの心を一時的にせよ、穏やかなものにしてくれました。1983年12月15日にわたしは日本基督教団という教派で洗礼を受けてキリスト教の信者になります。

キリスト教入信後、しばらくは、それまでの罪悪感から解放され、割と穏やかに過ごすことが出来ました。しかし、キリスト教の学びを深める中で、旧約聖書の申命記に、次のように記されているのを見つけてしまいます。「女は男の着物を身に着けてはならない。男は女の着物を着てはならない。このようなことをする者をすべて、あなたの神、主はいとわれる。」(申命記22章5節・新共同訳聖書)

心の平安を得たのもつかの間、この聖書の言葉を知ったことにより、今度はより深い絶望の淵へと、わたしは投げ込まれます。

割愛しますが、その後聖書により大きくなった罪悪感と、信仰に誠実でない嫌悪感を往復しながら、それでも自分をだましだまし、周りには嘘をついて、牧師になります。

名古屋で働き始め、いわゆる女装バーに出入りするようになり、自分だけではないという安心感を得ることが出来ました。しかし、そのことを誰かに知られれば、牧師として働くことが出来なくなることは、分かっていたので、死ぬまで「女装」することは隠しとおそうと思っていました。

1998年10月、埼玉医科大学において日本で公に行われる初めての性別適合手術(\*2)が行われます。この年の冬、名古屋を中心に東海地方で性別に悩む人と、その身近な人のための自助グループが発



足し、「もしかしたら自分も性同一性障害ではないのか？」という思いから、そこに参加するようになります。その中で、何が何でも手術をしたいとは感じませんでした。身体を女性に近づけたいという思いは自分の中で確かなものとなっていきます。

## (＊ 2) 性別適合手術

性同一性障害の治療として、内外性器など身体的性別を、外見上ジェンダー・アイデンティティと同一の性別に適合させる手術を指す。“Sex Reassignment Surgery” (SRS) の訳語。日本精神神経学会、GID 学会では「性別適合手術」を正式な名称として用いている。

また、同じ頃に「キリストの風」集会という様々なセクシュアル・マイノリティのためのキリスト教の集まりにも顔を出すようになります。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックスなどのクリスチャンを中心とした集まりは、信仰とセクシュアリティの矛盾に悩んでいたわたしにとって、精神的な安らぎを得る場所となりました。

聖公会というキリスト教の教派は、各国教会の緩やかなつながりであるアングリカン・コミュニオンを形成しています。1970年代から同性愛者の司祭按手について、幾つかの教区で議論され始めます。1989年にはアメリカ聖公会のジョン・シェルビー・スポング主教が、同性愛者であることを公言しているロバート・ウィリアムズを司祭に按手し、2003年には、カナダ聖公会ニューウェストミンスター教区で、同性婚の祝福式を承認しています。そしてアメリカ聖公会は、2003年11月2日同性愛者であることを公にしていた、ジーン・ロ

ビンソン司祭をニューハンプシャー教区主教に按手します。

わたしがカミングアウトをした当時、世界の聖公会は、同性愛者の按手と、同性同士の結婚という問題で、分裂の危機にありました。ですから、牧師の集まりでも、この同性愛のことが話題になっていました。しかし、決まって「日本には同性愛者がいない」という理由で、同性愛に関する話題が閉じられることが、何度かありました。この閉じられ方に、やり切れなさを感じて、2003年10月、わたしは教役者会という牧師の集まりの場で、性同一性障害であることをカミングアウトしてしまいます。わたしたちセクシュアル・マイノリティは、アメリカだけではなく、もちろんこの日本にもいるのですから。

2005年11月23日に開かれた、日本聖公会中部教区第75（定期）教区会の冒頭の主教告示で、わたしが性同一性障害であることを、公にでもあります。この教会全体へのカミングアウト後は、ホモホビア（\*3）の強いキリスト教会の中で、セクシュアル・マイノリティへの偏見を払拭する活動を始め、現在に至ります。

### （\*3）ホモフォビア / Homophobia

同性愛、同性愛者に対する恐怖感、嫌悪感を持つ「病理」のこと。1969年合衆国の心理学者ジョージ・ワインバーグ / George Weinberg が初めて使用し、1972年に「同性愛者の存在に対して異性愛者により表現された恐怖。同性愛者が自分自身に対して抱く強い嫌悪」と定義をした。K・T・スミス / K.T.Smith も 1971年に論文の中で使用。同性愛嫌悪（症）。特に男性同性愛に対するものが多い。この感情は社会が創り出しているイメージに基づくことが多く、暴力からいやがらせまで様々な形現れる。レズビアンに対してはレスポフォビア /

Lesbophobia、トランスジェンダーに対する嫌悪感はトランスフォビア /Transphobia ともいう。

ここで簡単にセクシュアル・マイノリティとは何かを押さえておきたいと思います。まずセクシュアル・マイノリティを分けるための基準となる、セクシュアリティとは何でしょう。性のあり方を示すセクシュアリティは、性行為や生殖、性別という限定された意味だけではなく、心や命を含んだ人間全体を包み込む広範な概念です。文脈によってはかなり異なった意味で使われることもあります。ここでは、生殖や性行為という行為よりも、性的指向、性的自認等を含めた、人間全体、生活や人生の問題として考えていきます。

人間の性別、セクシュアリティを、生物学的な性 (sex)、性的自認 (gender identity)、性的指向 (sexual orientation) 3つの要素で見てみましょう。

生物学的な性は、染色体の性別、ホルモンなどの内分泌の性別、卵巣や精巣等の内性器の性別、ペニス（陰茎）等の外性器の性別で、女性と男性の違いが大まかに認められ、それぞれに中間的な状態がスペクトラム状にあり得ます。

一般的には、受精のときに性染色体がXXであれば女性になり、XYであれば男性になるのですが、性染色体に従って、女性もしくは男性に性分化しない場合等もあります。また、そもそもXX、XY以外にも様々な性染色体の組み合わせを持つ人が知られています。このように医学的には身体の性別がそもそも女性 (female)、間性 (intersex)、男性 (male) と様々なバリエーションがあるにもかかわらず、社会生活を営む上での法律上は、女性か男性のどちらかに強制

的に振り分けられてしまいます。自然（神さま）は多様性を好まれるのに、社会（人間）が多様性を容認できないようです。

性的自認（gender identity）とは、自分が女性であるか、男性であるかの認識です。一般的に体が女性であれば、自分自身を女だと認識し、反対に体が男性であれば、自分を男性であると認識します。性同一性障害やトランスジェンダー（FtM, MtF）等の場合は、この性的自認が体の性別とは違う認識を示します。また、性的自認が女性でも男性でもない、Xジェンダー（FtX, MtX）と呼ばれる人々もいます。生物学的な体の性別と同様に、性的自認にも中間的な状態があり、女性の自認、男性の自認と二分は出来ませんし、それは境目のないスペクトラムなのです。

性的指向（sexual orientation）は、異性に魅かれるか、同性に魅かれるかという意識です。自分を「女性」と自認する人が「女性」に魅かれれば同性指向、同性愛であり、「女性」が「男性」に魅かれれば、異性指向、異性愛と言えます。しかし、この性的指向もスペクトラムなのであり、女性にも男性にも魅かれる人をバイセクシュアル（bisexual）、性別に関係なく人に魅力を感じる人をパンセクシュアル（pansexual）、性的な魅力を感じない人をアセときセクシュアル/エイセクシュアル（A-sexual）と呼びます。

以上3つの要素は、それぞれ独立したものであり、基本的には相互に影響し合わないと考えられます。例えば「男性同性愛者は、男性が好きなのだから、女性になりたいと思っている」という様に思われることが多いようですが、性的指向と性自認の間に、関連性はありません。

また、性別役割（gender role）も、人のセクシュアリティを把握す

るための指標の一つです。ただし、上記の3つの要素とは違い、社会環境・生育環境に左右されるものと考えられます。性的自認(gender identity)と混同されがちですが、別の要素です。ですから、体の性別が「女性」であり、性自認も「女性」、性的指向が「男性」に向く、典型的な女性が男性の性役割(gender role)で、社会生活を送るということもあり得ます。典型的な女性と男性の中にも、“女らしさ”“男らしさ”という性別役割にとらわれたくないという人は沢山いますので理解していただけるとと思いますが、わたしのようなトランスジェンダーが、この性別役割の非典型ではないことに注意してください。

以上見てきましたように、人間の性は典型的な女性と男性の間に、どちらにも明確には分けられない状態をはさんで、様々な要素のスペクトラムで示されるものです。セクシュアル・マイノリティと一口に言っても、一人ずつ違う多様なセクシュアリティがあると考えていただくのが良いのでしょうか。

そうは言っても、一人ずつ違う多様なセクシュアリティでは、捉えどころがなくなってしまうでしょう。あくまでも参考であることを踏まえていただき、代表的なセクシュアル・マイノリティを紹介します。

まず同性愛者です。同性愛者とは、性的指向が同性に向かう人ですが、趣味として選択する嗜好や自分で決定する志向ではありません。(同性愛の運動の中では、あえて嗜好や志向を使う人もいます。)同性愛が「病気」と規定されたのは、1869年にハンガリーの医学者ベンケルトが提唱したのが始まりです。このときに同性愛(Homosexuality)と異性愛(Heterosexuality)という言葉も作られました。ベンケルトは宗教的に「罪人」とされていた同性愛者の地位確

立のために「病気」と規定したのですが、その後「病気」とされたために「異常」「倒錯」「変態」というレッテルが貼られて、研究の対象になってしまいます。最近でも、キリスト教では、同性愛者を矯正して、異性愛者に治そうとする団体がありますが、アメリカ精神医学会は、1973年に同性愛を精神疾患のリストから外し治療の対象外としています。また、WHOも、1990年に「同性愛は精神疾患ではない」とし、1992年の「国際疾病分類（ICD：International Classification of Diseases）」の第10版で、「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とはならない」と宣言しています。

日本では1995年1月になってやっと、日本精神神経医学会が、上記の国際疾病分類ICDを尊重するという見解を発表して、同性愛を治療の対象から外しています。

厳密な調査は人権侵害になるため行われませんが、同性愛の人の割合は、少なく見積もっても、民族や国、地域に関係なく人口の3～5%とされています。これだけ高い割合で、同性愛の人がいるにも関わらず、目に見えない存在とされているのは、社会的な偏見がそれだけ大きいことを表していると言えるでしょう。「世界がもしも100人の村だったら」（マガジンハウス）では、「90人が異性愛者で、10人が同性愛者です」と記されています。

次に性同一性障害です。（わたしは「性同一性障害」や「性同一性障がい」という表記を使いたいのですが、一般的ではないので便宜的に「性同一性障害」と使っています。）「性同一性障害（GID：gender identity disorder）」は、国際的な疾患分類にあげられている、医学的な疾患名です。ですが、ジェンダー・アイデンティティのあり方は、

多様なセクシュアリティのひとつで、それが少数のものだからといって精神疾患とされるのはおかしいと考えられますので、わたしたち当事者が積極的に、「性同一性障害」を自らの呼称として用いることはありません。いずれは同性愛と同様に精神疾患のリストからは外されることを願っていますが、多くの人がホルモン療法や性別適合手術などの医学的治療を求めますので、何らかの医療サポートは必要です。

日本では、1997年に日本精神神経学会・性同一性障害に関する特別委員会が「性同一性障害に関する答申と提言」を発表し、性別適合手術が行えるようになりました。少し前まで、性同一性障害の人の割合は、MtFの場合3万人に1人、FtMの場合10万人に1人と言われていましたが、最近はもっと多いと考えられています。日本では統計を取ることが出来ていませんので、何とも言えませんが、わたしの実感としてももっと多いと思います。日本聖公会の信者数は、公称58,000人（そんなに多くありませんが…）ですので、最初の割合で考えると、わたしともう一人いれば良いくらいです。ですが、わたしが知っているだけでも、性同一性障害の信者さんは、私を含めて日本聖公会に10人もいるのです。

3番目に、性分化疾患（インターセックス/disorders of sex differentiation）を見てみましょう。最近までインターセックスと呼ばれてきた、性分化疾患とは内性器や外性器、内分泌系、性染色体などで、典型的な男女と異なる身体的な特徴を持つ人のこととされますが、医療分野や医師によって見解相違があり、決定的な定義はありません。新生児の2000人に1人の割合で、女であるとも男であるとも判別しづらい身体をもったインターセックスの子どもたちが生まれ

ているとも言われます。過去には性分化疾患の子どもたちが、生後間もない段階で本人の意思とは無関係に外科的手術を施され、典型的な女性もしくは男性に見えるように身体を「修正」されることがあったと言われ、その存在は見えなくされてきました。現在は、可能な限り本人が成長するのを待って、本人の意思を尊重して治療を行うという方向に変わりつつあるそうですが、典型的な女性もしくは男性の身体にすべきだという考えも根強くあります。当事者の中では、自分たちの状況をセクシュアリティの問題ではなく「障害」として捉えて医療の高度化を望む声が多いそうです。

以上、代表的なセクシュアル・マイノリティを概観しましたが、わたしたちの社会は女と男のいずれかに分けられる男女二分法の社会です。しかし、それは社会が制度として作り出している枠組みであることをまず認識していただきたいと思います。そして「異性愛が当たり前で同性愛は『異常』」「人間は男か女のどちらかしかない」という思い込みや偏見が、典型的な性別の枠組みに入らない人々にとって、どれほど無神経な対応であるかを考えてみていただきたいと思えます。折角、神さまは多様で豊かな人間の“性”を、わたしたちに与えてくださっているのに、わたしたちの乏しさが、豊かな人間の“性”乏しいものしてしまっているのではないのでしょうか。

さて、今回のテーマは「セクシュアル・マイノリティとキリスト教」ですので、キリスト教のことを、少し考えてみます。

キリスト教は愛の宗教であると、言ってきましたが、幾つかの差別を「聖書」によって肯定するという残念な歴史も持っています。女性



差別がその最たるものです。創世記2章18節では、「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」と神さまがおっしゃっている。つまり女は男を助けるために創られたのだと語り、さらに22節で「そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。」という箇所から、女は男のアバラ骨から創られたのであって、男に従属するとされてきました。

詳しくは触れませんが、他にも新約聖書のテモテへの手紙Ⅰ第2章9～15節やコリントの信徒への手紙Ⅰ第11章3～9節等の箇所を根拠にした、女性が男性の下位にあることの主張は、今でも枚挙に暇がありません。多くの教会が、それらの主張が誤っていると、しっかりと聖書に基づいて考えるようになってきましたが、もう少し時間がかかりそうです。しかし、聖書を振りかざして、女性差別を正当化するなどという無謀なことは、恥づかしくて出来ないのです。

南アフリカ聖公会のデズモンド・ムピロ・ツツ大主教をご存じの方は、結構いらっしゃるのではないのでしょうか。ツツ大主教は、南アフリカ共和国におけるアパルトヘイト (Apartheid) を、無くすために尽力された方です。この黒人差別も、キリスト教が聖書を根拠にしてきました。旧約聖書の創世記第9章21～27節が、黒人差別の根拠とされています。そこに記されるハム(カナン)が黒人の祖先だとされ、「奴隷となれ」と言われていることで、黒人差別を正当化しました。他にも、新約聖書のテモテへの手紙Ⅰ第6章1節「軛の下にある奴隷の身分の人は皆、自分の主人を十分に尊敬すべきものと考えなければなりません。それは、神の御名とわたしたちの教えが冒瀆されないようにするためです。」などで、奴隷制度を正当化してきました。

女性差別や黒人差別を正当化したのは、一部の人々であったかも知

れません。また、現在では、真面目にそんな主張をすることは出来な  
てはいます。しかし、確かに聖書を根拠に、キリスト教は差別を正当  
化してきたのです。

以下にある牧師の説教の一部を引用します。

『同性愛者である人を自分の教会の牧師には迎えたくない』という  
発言があったことです。そのような発言は『差別発言』だ、そのよう  
な発言がなくなるように取り組みを進めよう、というわけです。この  
主張は要するに、同性愛も人間の自由と権利の一つであって、同性愛  
者は牧師になるにはふさわしくないとするのは人権の侵害、差別だ、  
ということです。同性愛については、医学的にもいろいろな議論があ  
り、本人の責任と言うよりも先天的な問題なのだとも言われています  
から、なかなか難しい問題であることは確かです。しかし聖書におい  
ては、旧約の律法でも罪とされており、ローマの信徒への手紙の第 1  
章においてパウロもこれを人間の罪の表れの一つとしています。少な  
くともそれが伝統的な聖書解釈です。ですから、聖書を信仰の規範と  
する教会において、聖書を教える立場である牧師になる人が同性愛者  
であることには相当の矛盾が生じるはずなのです。しかしそのような  
ことを言う『差別発言だ』と糾弾されてしまうという現実がありま  
す。ここにも、聖書よりも自分たちの考えを上位に置いて、聖書が『み  
だらな行い』と言っていることをむしろ積極的に肯定し、誇っていく  
高ぶりがあると言えるのではないのでしょうか。」

先に見ましたように、教会は聖書を後ろ盾にして、女性差別や黒人  
差別を正当化しました。聖書は、色々な時代に、様々な地域で、多く

の人によって記されたものです。そこには、相反することや、食い違う主張もゴチャゴチャに記されているのです。ある部分を取り上げて来て、聖書よりも自分たちの考えを上位に置いて主張することは簡単なことです。だからこそ、聖書が人の命を光り輝かせるためにわたしたちに与えられているということを忘れてはならないのです。上記の引用で牧師が言うように、「同性愛は罪」と記していると読める箇所は、聖書の中にあります。しかし、キリスト教は人の命の輝きを奪わないためにも、しっかりとその聖書の意味を考えなければなりません。

また、聖書の中には、同性愛を、セクシュアル・マイノリティを肯定していると読める箇所も、幾つかあります。例えば、マタイ福音書の第8章5～13節の百人隊長の僕をいやす話がそうです。本当に同性愛を聖書が罪としているのならば、この百人隊長にイエスさまは、僕との関係を改めるようにと、まず語られたのではないのでしょうか。むしろ、イエスさまはこの百人隊長の信仰を、「イスラエルの中でさえ、～これほどの信仰を見たことがない。」と称賛され、僕の病気をいやされたのです。

ツツ大主教は、アムネスティ・インターナショナル英国の出版した『Sex, Love & Homophobia (性と愛とホモフォビア)』に序文を寄せおられますが、「ホモフォビアは人間性に対する罪であり、アパルトヘイト政策と同じく、いかなる意味においても正当化されえない。」「黒人は本人にはいかんともしようのない肌の色によって追い責められたが、性的指向によって差別される人々も同じ目にあっている。」と記されています。

キリスト教が、女性差別や黒人差別を克服しつつあるように、同性

愛者、セクシュアル・マイノリティへの偏見から解放される歩みへと、神さまによって招かれていることを信じたいと思います。

セクシュアル・マイノリティの皆さん、いただいた命を光り輝かせる歩みを、いっしょに始めて行きましょう。神さま、わたしたちをセクシュアル・マイノリティとして創り、豊かな命を与えてくださったのですから。

そして、そうではないと思っている皆さん、あなたのセクシュアリティを見直してみてください。あなたが素敵な存在であるように、あなたの隣りにいるセクシュアル・マイノリティも、素敵な存在でなのです。あなたの隣りに、わたしたちセクシュアル・マイノリティがいることを、どうぞ覚えてください。

# 「桃山学院大学の建学のルーツ： 聖公会が大切にしてきたもの」

西原 廉太

只今ご紹介いただきました西原と申します。本日は「聖公会が大切にしてきたもの」という演題でお話をさせていただきたいと思います。

皆さんの桃山学院大学と私の属しております立教大学は同じ聖公会をルーツに持つ姉妹校です。皆さんの桃山学院は、英国の聖公会の CMS という宣教協会の宣教師として来日した、チャールズ・フレデリック・ワレン司祭が、1884 年に、大阪の「川口外国人居留地」（現在の西区川口町）居留地内の聖三一教会の一室に小さな男子校（三一小学校）と三一神学校を開設したことに遡ります。ですので、今日、私がお話をさせていただく内容は、実は、みなさんの大学の建学の意味、精神を語ることでもあるのです。

それでは、さっそく、まずは聖公会にゆかりのある方々を紹介したいと思います。

この方は黒船で有名なペリー提督です。マシュー・ガルブレイス・ペリーというのが本名です。ペリー家は元々聖公会の家系で、彼もアメリカ聖公会の熱心な信徒でした。ペリーは晩年、アルコール依存症から肝硬変を患い、1858 年に 64 歳で亡くなります。そしてペリーは、ニューヨークの聖公会の教会の墓地に葬られました。

次に初代駐日公使となりましたハリスです。タウンゼント・ハリス

というのが本名です。日米修好通商条約を締結したことなどでよく知られているハリスも、聖公会の熱心な信徒でした。ハリスは日本に滞在している間、聖公会の信徒宣教師のように、さまざまな伝道活動も行ってたのです。恐らくこの事については、日本の歴史教科書には載っていないと思います。

ペリーについて一つエピソードをご紹介します。ペリーは何回日本に来ていたかご存知ですか。2回、日本に黒船で来航しています。2回目は1854年3月6日にミシシッピ号で来航しました。その船には、ロバート・ウィリアムズという若い陸戦隊員が乗船しておりました。そのウィリアムズ隊員が、脳の病で亡くなったのです。当時の航海記録によりますと、ロバート・ウィリアムズ隊員の葬儀が、亡くなった3日後の、1854年3月9日に行われたと記載されております。

その葬送式は、アメリカ聖公会のペリー艦隊のチャプレンであったジョージ・ジョーンズ司祭により、横浜で執行されました。チャプレンというのは、大学や病院や施設付きの牧師のことをいいます。そのときに用いられた式文は、当然ながら、アメリカ聖公会の祈祷書（礼拝の本）で行われました。ですから、日本で最初に聖公会の式文を用いて礼拝が行われたのは、実はこのペリー艦隊の隊員のお葬式だったのです。

16世紀にカトリックの宣教師が日本にやって来て以来、2世紀以上の間、日本は禁教になっていましたが、「キリスト教儀式を、当時2,000人ぐらいの人たちが目撃した」と航海日誌には書かれております。その葬式は、増徳院というお寺の境内で行われました。それが今の横浜の山手外人墓地の発祥のルーツとなっております。その時の航海日誌によりますと、「ウィリアムズの葬送式をジョーンズ司祭が聖

公会の祈祷書で行っているその真横で、増徳院の高僧がお経を唱え、ウィリアムズ隊員の死を悼んでいた」というのです。また、「葬送式が終わり、ペリー艦隊の隊員が隊列を組んで船に戻った後もずっと、そのお坊さんはウィリアムズのために祈っていた」と航海日誌には書かれております。航海日誌を書いた記録者は、「日本の宗教は素晴らしく、大変感銘を受けた」と記しております。そのようなわけで、日本における聖公会としての初めての礼拝が、ペリーとゆかりのある形で行われたのです。

その後、本格的に聖公会による宣教が日本で行われたのは、やはりアメリカ聖公会によります。アメリカの聖公会の宣教師、チャニング・ムーア・ウィリアムズが1859年に、上海から長崎に上陸しました。まだその当時は、キリスト教は禁教でしたから、ウィリアムズは長崎の崇福寺というお寺に居住しながら、ずっと日本における伝道の機会をうかがっておりました。その期間、なんと7年です。7年間崇福寺に籠もって、ひたすら彼は中国語の祈祷書を日本語に訳したり、聖書の日本語訳を作ったり、さまざまなお祈りを日本語に直したりしながら生活をしていました。しかし、全く見通しがなかったのです。私のようなせっかちな人間は、7年間もじっとそこに留まることはできません。ですから、もしウィリアムズ主教がもっと短気で我慢できない人であったなら、今の日本の聖公会はなかったのではないかといえるかもしれません。

そして、1867年にようやく日本の禁教が解けましたので、ウィリアムズは日本における宣教を開始することができました。そして、アメリカ聖公会だけではなくて、1873年には英国聖公会からも宣教師がやって来ました。アメリカ、イギリス、両方から日本に聖公会の宣

教師がやって来るのですが、まだこの時点での宣教活動は、ウィリアムズを中心とするアメリカ聖公会が中心に行っていました。このウィリアムズ主教は、1873年に東京へ移って、1874年に築地に立教学校を造ったのです。今の立教大学の前身です。そして現在、立教は築地から池袋に移転しております。そして、最初にお話ししたように、1884年には、ワレン司祭によって、皆さんの桃山学院の基礎が据えられるのです。

この写真は、立教のキャンパス内の、チャペルの前にあるウィリアムズ主教の銅像です。彼は中国主教ではなくて江戸主教という形で、この日本の東京において宣教を始めていくわけです。

先程もお話しましたが、1859年はウィリアムズが長崎にやって来た年です。これが日本の聖公会の出発の年であるということです。今から3年前の2009年には、日本聖公会150年のお祝いをいたしました。場所は東京のマリア大聖堂（カトリックの大聖堂）。日本聖公会には、3,000人が入る大聖堂がないものですから、カトリックのものをお借りして、礼拝を行いました。立教もその年、創立135周年ということでお祝いをいたしました。

ただ、この150年というカウントの仕方なのですが、これについてはさまざまな異なる見解があります。何故かといいますと、ウィリアムズが長崎にやって来た1859年の13年前、1846年に、イギリスのCMSという聖公会の宣教団体の信徒宣教師であるバーナード・ジャン・ベッテルハイムが、日本にやって来ています。どこに来たかといいますと、琉球です。沖縄にやって来て、伝道をしていたのです。これは非常に重要な出来事であるので、1846年という年も、私たちは記憶に留める必要があると思います。



この1846年、ベッテルハイム琉球伝道が何故、日本における聖公会の宣教の出発点とならなかったかといいますと、彼の伝道が個人的なものであったからだといわれているからです。しかし実際はそうではなかったのです。当時の香港にいた聖公会のジョージ・スミスという主教が、琉球にいたベッテルハイムを訪問した際の公式報告書が残っております。その報告書によりますと、ベッテルハイムの伝道が、当時の日本の伝道を始めるただ一つの回路であったということなのです。何故ならば、当時の幕府はキリスト教を禁じていましたから、日本の本島には直接伝道ができなかったのです。しかし、琉球政府を通して、ベッテルハイムの伝道が幕府まで繋がることがあったそうなのです。ですから、ベッテルハイムの宣教というのは、あくまでもオフィシャルなものであったことが、さまざまな資料から分かるのです。

先程もお話しましたウィリアムズ主教や、日本の聖公会を作った中心人物を覚えることは大事なことなのですけれども、同時に歴史の外側に、周辺に置かれた出来事や人物に焦点を当てるとすることは、非常に大事なことだと思います。

この方はジョン・パチェラー宣教師です。聖公会北海道教区では、「パチェラー」というような表現が正しいのでしょうか。彼は1877年に英国から来日して、北海道にやって来ました。そして、アイヌの人々に伝道をしました。いわゆるアイヌ伝道です。彼は北海道にやって来て、アイヌのコタン（村）を回り、そしてアイヌのエカシ（長老）と交流を持ってコタンの伝道を行いました。そして、アイヌの人々の生活と密着して、アイヌの豊かな文化性あるいは言葉を大事にしたのです。彼は様々な施設も作りまし、アイヌの人たちの権利を守るための、さまざまな働きもしました。例えば彼は、英語とアイヌ語と日本語の

3か国語の辞書を作りました。そのような意味で、彼は「アイヌの父」ともいわれている方なのです。そのアイヌ伝道をしたバチェラーの影響で、アイヌの人々の中にもキリスト教と出合う方々が出て来ました。

その中の一人が、知里幸恵です。彼女はどのような人かといえますと『アイヌ神謡集』を書いた方です。「アイヌ神謡」とはユーカラといえます。ユーカラとは、アイヌの人々が口伝の文化の中で代々伝えてきた神々の物語です。アイヌの信仰ではたくさんの神がいます。自然の生き物や木々、そのようなものも神なのです。そのユーカラを集めて、『アイヌ神謡集』を文字にして筆録をしたのが、この知里幸恵という女性なのです。

知里幸恵は若くしてこのユーカラで、国語学者の金田一京助に見出されました。後に金田の住む東京へ北海道から移り、口伝であったユーカラを文字にして置き替え、この神謡集を完成させました。そのような非常に貴重な働きをしたのですが、彼女は僅か19歳にして、心臓の病で天に召されたのです。

先ほどのバチェラーから伝道を受け、聖公会のアイヌ人伝道師となった金成マツという方がおります。この方は幸恵の伯母なのですが、幸恵の育ての親なのです。彼女はユーカラの伝承者でもあったということで、幼いころから幸恵は、耳でユーカラを聞いていました。同時に幸恵は、バチェラーの始めた教会の日曜学校で文字を学んでいたのです。日本語も、それからローマ字も学んでいました。そのようなわけで、金田一京助が幸恵に目を留めたのです。

幸恵は洗礼を受けています。彼女の日記を読みますと、彼女の生き生きとした信仰が記されており、19歳で亡くなるまで、彼女にとってキリスト教、福音というものがいかに大きなものであったかがよく

分かります。

金田一京助も、後に幸恵についてこのように書いています。ちょっとお読みします。「この幸恵という娘は、人が犠牲になったという話が出ると、その犠牲になった人のためにお祈りをするのです。キリスト、その人も民の犠牲になった、立派なお方です。人の犠牲になった方たちを羨ましい、そう考える娘でした」、そのようにいっているわけです。

知里幸恵は最近、いろいろなメディアで取り上げられております。最近も『朝日新聞』に特集が出ていましたし、NHKでも特集番組が放送されました。しかし残念なことに、キリスト教との接点については取り上げられませんでした。確かに彼女の功績というのは、アイヌ文学を残したことで、そのような意味ではキリスト教との接点は小さいことかもしれません。しかし何故彼女がユーカラを残そうとしたかを推察しますと、キリスト教との接点を抜きには考えられないと私は思っております。

幸恵が、膨大なユーカラの中で一番大事にしているユーカラがあります。先ほどの神謡集の最初に出てきます。それは『梟（フクロウ）の神の自ら歌った謡』です。「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」で始まるユーカラです。ちょっとお読みしたいと思います。

「…『銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに』という歌を歌いながら子供等の上を通りますと、(子供等は)私の下を走りながら云うことには、『美しい鳥！ 神様の鳥！ さあ、矢を射てあの鳥、神様の鳥を射当てたものは、一ばんさきにとった者はほんとうの勇者、ほんとうの強者だぞ』。云いながら、昔貧乏人で今お金持ち

になつてゐる者の子供等は、金の小弓に金の小矢を番えて私を射ますと、金の小矢を私は下を通したり上を通したりしました。その中に、子供等の中に一人の子供がただの（木製の）小弓にただの小矢を持って仲間にはいつています。私はそれを見ると貧乏人の子らしく、着物でもそれがわかります。（中略）

自分もただの小弓にただの小矢を番えて私をねらいますと、昔貧乏人で今お金持ちの子供等は大笑いをして云うには、『あらおかしや貧乏の子、あの鳥、神様の鳥は私たちの金の小矢でもお取りにならないものを、お前の様な貧乏な子のただの矢腐れ木の矢をあゝの鳥、神様の鳥がよくよく取るだろうよ』と云つて貧しい子を足蹴にしたり、たたいたりします。けれども貧乏な子は、ちつとも構わず私をねらっています。私はそのさまを見ると、大層不憫に思いました。『銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに』という歌を歌いながらゆっくりと大空に、私は輪をえがいていました。貧乏な子は、片足を遠く立て片足を近くたてて下唇をグッと噛みしめて、ねらっていて、ひょうと射放しました。小さい矢は美しく飛んで、私の方へ来ました。それで私は手を差しのべてその小さい矢を取りました。クルクルまわりながら私は、風をきつて舞い下りました。…』

「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」というように、どんどん続いていくのです。これが『梟（フクロウ）の神の自ら歌つた謡』なのです。幸恵が一番大事にした歌なのです。金持ちの子が射放つ金の矢には、フクロウの神は当たらないのです。当たらなかつたフクロウの神様が、ぼろぼろの着物をまとつて、他の子供たちからばかにされて、足蹴にされる貧しい子を憐れに思うのです。そして、その子が放つた木の矢に、自ら当たり、「銀の滴降る降るまわりに、金

の滴降る降るまわりに」と、その子のために歌いながら、フクロウの神は自ら命を絶ちながら落ちていくというユーカラなのです。

そのような美しく哀しいユーカラを、何故、幸恵が一番大事なユーカラとして選んだのでしょうか。私はそこには確実に、彼女の中にイエスの福音があったからだと思うのです。

彼女の日記の中に日曜学校の思い出があります。彼女はその中で、教会の日曜学校で、アイヌの子どもたちが虐げられていた事を書いておられます。「イエスは一体、誰と共に生きられたのか」ということです。パチェラーが伝えた福音書、聖書を彼女が読んで、「まさにイエスという方は、虐げられ、貧しく、足蹴にされている人たちのために自ら死んで、そしてよみがえられるのだ」という福音を、彼女は日記の中で語っているわけです。

そのような福音の教えが彼女の心の中にあって、この『梟（フクロウ）の神の自ら歌った謡』を選ばせたと私は考えております。もちろん、パチェラーがたまたま聖公会だったということもあるかもしれませんが。しかし、聖公会という教会が伝えた福音が、ある意味、パチェラーが予期していないような形で実を結んでいったのではないのでしょうか。

次に、岡谷の教会と「女工哀史」についてお話いたします。

私は現在、東京に住んでおりますが、実は牧師（聖公会の司祭）もしております。長野県の諏訪湖というところをご存じでしょうか。諏訪湖のほとりにある、岡谷聖バルナバ教会で牧師をしております。

この教会は、今から 84 年前の 1928 年に、カナダの聖公会の宣教師が建てました。当時、長野県周辺では、カナダの聖公会の宣教師が宣教しておりました。その宣教師は、諏訪湖一帯を宣教していた、ホ

リス・コーリーという司祭でした。どこに教会を建てるかという話になった時に、カナダの聖公会本部は、賑やかな上諏訪、下諏訪に教会を建てなさいという指示を出しました。しかし、コーリー司祭は、「いや、教会を造る場所は、その土地の中で一番辛い思いをしている人、苦しい思いをしている人たちのために教会を建てたいんだ」と主張しました。

当時の諏訪湖一帯で一番辛い思いをしていたのは誰かといいますと、岡谷の町の製糸工場の女工たちでした。岡谷は「シルク岡谷」といわれていまして、製糸工業では世界的に有名な町だったのです。岡谷の人口は、1920年当時と今とではあまり変わりません。6～7万人ですが、そのうちの7～8割が10代の女工たちでした。

皆さんは、山本茂実の『あゝ野麦峠』という本をご存じでしょうか。あれは、木曾から野麦峠を越えて岡谷に出てきた女性たちの物語です。過酷な労働を強いられ、そして病気になったら使い捨てにされ、多くの女工が死にました。その凄惨な様子が『岡谷女工虐待史』という、当時の共産党が出版した本に記載されています。

そのような女工たちがたくさん住んでいる岡谷の地に、コーリー司祭が建てたのが、岡谷聖バルバナ教会なのです。ですから、この教会は女工さんたちのために建てられた教会でした。小さな教会ですが、現在まで残っていることはまさに奇跡です。この教会の中は畳敷きなのです。なぜ畳敷きかといいますと、女工さんたちは1日16時間労働で、休み時間は全部足しても40分足らずしかありませんでした。労働している間は、硬い木の椅子に座っておりましたので、教会に行く時は、実家に帰ったような気持ちになりたいというリクエストがあって、コーリー司祭は畳敷きにしたのです。この教会はそのような

彼女たちが癒やされて、慰められて、励まされて、そして自らの尊厳を回復していく、そのような場として存在して来たのです。そのような理由で現在も畳敷きなのです。是非、皆さんも長野県に来る機会がありましたら、お寄りいただければと思います。

岡谷聖バルバナ教会には、元女工さんで96歳の深澤小よ志さんという方がおられました。深澤さんは、残念ながら今年の1月に主のもとに召されました。彼女は、まさに教会が出来た当時、信徒になった方です。その彼女がお元気な時に、私にこのようなことを語って下さいました。「なけなしのお小遣いを献金として手に握り締めながら教会に駆けつけると、階段の下で背の高い、青い目の司祭さんが待ち構えていて、『よく来たね』と言って私を抱き締めてくれた。お説教の意味はほとんど分からなかったけれども、司祭さんが抱いてくれた温かさとぬくもりに、私は涙があふれた。教会は確かに天国だった」。そのような証言をして下さったのです。彼女の病室の枕元には、聖公会の祈祷書とぼろぼろになった聖書が置かれていました。私が手を握ってお祈りをすると、いつも顔がほころぶのです。その彼女を支えたのは、まさにキリストの信仰であったのではないかと思います。

次に、英国の宗教改革で誕生した聖公会が、どのようなものを大事にしているかをお話したいと思います。

まずは、ケルトのスピリチュアリティとベネディクトの伝統についてです。

聖公会という教会はよく、「中道の教会」といわれております。真ん中の教会であるということです。ローマカトリックとプロテスタントの間であるということです。ですから、カトリック的なものも残しているし、ローマに対抗したという意味ではプロテスタントだとも

いわれております。カトリックの中でも一番伝統的な古い修道会は、ベネディクト修道会ですので、ケルトの伝統とベネディクトの伝統を併せ持ったのが、聖公会だと認識しております。

基本的には、ベネディクト修道会の修道院長であるオーガスティンが、597年に英国のカンタベリーに到着した時から聖公会の歴史は語られます。しかしながら、実際には、オーガスティンが英国にたどり着く以前から、英国にはキリスト教が存在しておりました。それは、かつてローマ帝国が、まだキリスト教を禁教としていた時代になります。

ローマ帝国がまだキリスト教を禁じていた時代に、クリスチャンたちは隠れているか、あるいは亡命していたのです。亡命したクリスチャンは、スコットランドあたりから、さらに北のアイルランドまで行きました。そして亡命したキリスト教徒がその地に定着し、すでにそこにあったケルトの宗教、文化と、彼らが伝えてきたキリスト教が融合して、ケルト・キリスト教というものが生まれました。このような形で土着する例は日本においてもあります。幕府が禁教している間に、日本の文化とキリスト教が融合していったようなケースです。

そのようなわけで、独自の歩みを始めたケルト・キリスト教というものが、オーガスティンが597年に英国に行く前からすでに存在していたのです。そして、ローマのキリスト教、王道のキリスト教とケルト・キリスト教は徐々に中身が違って来ました。最終的には664年に、ホイットビーというところで宗教会議が行われ、そこでローマ型が優勢になったという歴史があります。いずれにしても、ここで皆さんに私がお伝えしたいことは、ケルトのキリスト教が、聖公会の中にDNAとして入っているということなのです。聖公会のことを英語



ではアングリカンといますが、アングリカンの中にはケルティックなものが入っているのです。

そのケルトの雰囲気はどのようなものかといいますと、水、大地、風、炎のような自然のものをすごく大事にするということです。いわゆるアニミズム的なものです。そのような意味では、非常にアイヌのスピリチュアリティとよく似ていると思うのです。ケルトのスピリチュアリティは、非言語的なもの、感性的な、五感で感じるようなものを大事にいたします。いわゆる「千の風になって」という歌のような雰囲気です。あるいは「ハリー・ポッター」の世界です。イギリス人は妖精が大好きなのです。それはやはり、ケルティックなバックグラウンドがあるからだと思います。

もう一つ、ケルト・キリスト教には二つのキーワードがあります。一つは harmony、調和です。もう一つは eternity、永遠です。調和と永遠という二つのキーワードがあります。それから、闇から光へ、絶望から希望へ、そのような時間軸です。ベネディクトのキリスト教の方は、もっと言語的、論理的なものです。あるいは合理的な、非常に組織的なものです。全然雰囲気が違います。その二つの要素が聖公会の中に混在しているのです。

ケルト・キリスト教を表示するシンボルは主に二つあるのですが、一つはケルト文様。これは『ケルズの書』という、ルカによる福音書の挿絵です。中表紙のもので、非常に美しい。これを拡大しますとよく分かるのですが、ケルト文様というのは唐草文様のようなものだったり、トリニティーといひまして、勾玉のようなものが三つ並んでいたりするのが特徴です。これは『リンディスファーンの福音書』というものです。これもまた福音書の挿絵なのです。非常に美しい文

様です。

もう一つのシンボルは、ケルト十字というものです。このケルト十字は、The Anglican Communion A guide という、世界の聖公会のガイドブックに出て来るものです。普通、十字架といいますが、縦・横のものと思われるでしょう。しかし、十字架にはたくさん種類がありまして、この縦・横というのはローマ十字といいますが、バツテン型もあるのです。バツテン型は聖アンデレ十字といいますが。

これはケルト十字といわれるもので、ローマ十字に円環、輪が重なっているものです。この太い輪ですが、内側の輪が太陽、外側の輪が宇宙を表し、調和、永遠性の意味があるといわれています。西欧のお墓などに行きますと、このようなケルト十字、ケルティック・クロスをたくさん見付けることができます。これがケルト・キリスト教のDNA、アイデンティティを象徴しているものなのです。私たちの聖公会は、ルーツとしてこのようなケルトの伝統、またはベネディクトの伝統の両方を持っているわけです。聖公会の教会や施設などに行きますと、よくこのケルト十字を発見することができます。2001年に、立教大学の正門の工事中、門の横からりっぱなケルト十字架が発掘されました。このケルト十字は元々、立教のチャペルの屋根の両端に載っていたもので、これが関東大震災で崩落したのではないかとわれております。今このケルト十字は、立教大学の新座キャンパスに安置されております。そのようなわけで聖公会は、ケルト的なものとローマ的なものの両方を大事にしているということなのです。

年表の最初に戻りまして、オーガスティンが597年、英国カンタベリーに到着。この辺のお話をいたします。6世紀の末に何故オーガスティンが英国に来たのでしょうか。その頃、ローマのベネディクト

修道院の院長で、グレゴリウスという人がおりました。当時のローマ社会には奴隷制度があり、10代の少年たちが売り買いされておりました。修道院の院長の務めとして、その奴隷たちを慰問するという仕事がありました。これは半ば伝説なのですが、いつものように彼が奴隷市場に行くと、向こうの方に青い目で、金髪の白い肌をしている少年たちがいるのを見つけるのです。それでお付の人にグレゴリウスが聞くわけです。「彼らはどこから来たのか」。そうするとお付の人が、「彼らはアングロから来た人たちだ」と答えます。アングロというのは現在の英国という意味です。そこで彼がこう叫んだといわれております。「いや、彼らはアングロ (Anglo) ではなくてアンゲリ (Angeli) だ」と。アンゲリというのはラテン語で、天使という意味なのです。「彼らはアングロではなくて、天使たちだ。その天使たちを呼んでこい」と言ったという伝説があるのです。

グレゴリウスはそれをきっかけに、その天使たちが住んでいる国へ、きちんとしたキリスト教、要するにベネディクトのキリスト教を伝えたいという思いになったといえます。そして彼は英国伝道を計画しました。今でこそローマからロンドンへ行くのに、飛行機でわずか2時間程ですが、当時はアルプスを越えて、そしてドーバー海峡を渡ってと、大変な時間とお金が掛ったのです。しかし彼が資金を貯め、人や資材も用意して、いよいよ英国伝道に旅立とうとした時、彼はローマ教皇に選ばれ、グレゴリウス1世となってしまったのです。

現代のローマ教皇は、世界中を飛び回っておりますが、当時の教皇はずっとローマに居なくてはならなかったため、彼は英国伝道に行けなくなってしまいました。そこで「せっかく資金も人も用意したのにもったいない」と思ったグレゴリウスは、後任の修道院の院長であっ

たオーガスティンに、「おまえ、行ってこい」というわけです。オーガスティンは、嫌で嫌でしょうがなかったといわれております。しかし、教皇の命令は絶対ですので逆らえなくて、渋々英国伝道に旅立ちます。そして 597 年にカンタベリーに到着したのです。

そしてカンタベリーに修道院を建てます。しかし 16 世紀のヘンリー 8 世の時代に解体され、その跡地は現在世界遺産になっております。その横にもう一つ修道院が造られ、後に大聖堂になります。それがカンタベリー大聖堂で、これもやはり世界遺産です。

このカンタベリー大聖堂が現在、聖公会のローマでいうところのバチカンに当たる存在になっているのです。先ほどのオーガスティンが初代のカンタベリー大主教で、このカンタベリー大主教というのが、世界に広がっている聖公会のシンボル、中心です。現在は、ローワン・ウィリアムズという方が、第 104 代カンタベリー大主教です。

それでは、カンタベリー大聖堂の中で何が一番大事だと思いますか。実は「椅子」なのです。カンタベリー大主教の椅子、「主教座」なのです。大聖堂は椅子を覆っている覆いなのです。座る人よりも椅子の方が大事なのです、実をいいますと。聖公会であるということは何かという、この「オーガスティンの椅子」とリンクを張っているという意味なのです。ですから、例えば桃山学院大学が聖公会の大学であるということは、桃山学院大学はこの椅子とリンクを張っているということです。ローワン・ウィリアムズ大主教はおとし、聖公会 150 年の際に訪日され、ここ桃山学院大学も訪問され、すばらしいメッセージを残してくれました。

さて、英国の宗教改革は 16 世紀で、ヘンリー 8 世の時代です。ヘンリー 8 世は国王ですが、彼は同時に信徒なのです。エドワード 6

世やエリザベスも信徒です。信徒がローマの教皇の権威よりも上に  
来るという、「国王至上法」というのが 1534 年に出されるわけです。  
そのような意味では、ルターやカルバンの宗教改革と同じように、聖  
公会も信徒中心の宗教改革であるといえます。英国国教会（英国聖公  
会）の総会では、必ずオープニングメッセージを国王が行います。何  
故かといいますと、聖公会の信徒の代表だからです。しかも、この英  
国国教会の総会が最初に行われたのが、いつだと思いませんか。1970  
年です。1970 年に第 1 回総会が行われています。「え？」と思われ  
ませんか。それまでは総会はなかったのでしょうか。実は、国会、英  
国の議会そのものが、英国国教会の「信徒総会」でした。国会議員は  
信徒、パリッシュという教会区から選出される信徒代表議員なのです。  
ですから祈祷書など、教会の事柄も全部、国会の法で決めていたの  
です。

聖公会の宗教改革を特徴づけたのは、リチャード・フッカーという  
神学者です。彼が大事にしたのは、「聖書・伝統・理性」という権威  
理解と、あらゆる絶対主義の否定です。このような理解を聖公会の神  
学として打ち出しました。ここが少しヨーロッパ大陸の宗教改革と違  
う点です。ルターは「聖書のみ」と言いました。聖公会の改革はそう  
ではなくて、聖書はもちろん大事にしますけれども、聖書だけではな  
くて伝統、それから理性を大切にしました。人間の経験や、さまざま  
な日常の体験、そのようなものを大事な権威の源泉として考えて、そ  
こからあらゆる絶対主義を否定したのです。

それは例えば、「聖書のみ」という極端な聖書絶対主義を採らない。  
そして、「教皇のみ」という伝統絶対主義も採らない。あくまでも、「聖  
公会は、真理を求めて探求していく、真理を求めて道を歩き続ける旅

人である」という自己理解なのです。その旅を続けるための「目じるし」が聖書であり、伝統であり、理性なのだという考えです。常に解釈し続ける教会、共同体というのが、聖公会の教会理解なのです。常に解釈し続けている。ですから、終わることのない旅です。よく聖公会は、「中途半端ですね」、「何か曖昧ですね」と言われますが、ファイナルアンサーを出さない教会なのです。「答えをご存じなのは神様のみ」ということです。私たちは、「真理を求めて常に歩み続ける旅人なのだ」というのが聖公会の立場なのです。

その中で、聖書や理性がとても大事にされました。理性というのはどちらかという、実験や経験に近いものです。個人の合理主義というよりも、共同体の経験です。ですから、自然現象から何かを学ぶというような自然科学がイギリスで発展した理由は、間違いなく聖公会の神学がバックグラウンドにあると言えます。

例えばアイザック・ニュートン。彼も聖公会の「神学者」として、ウェストミンスター寺院にお墓があります。経済学者のケインズはニュートンの研究者で、晩年のニュートンのさまざまな資料を集めました。ケインズの研究結果では、ニュートンは晩年、『ヨハネ黙示録』や『ダニエル書』等の聖書研究しかしていなかったということです。ダーウィンのお墓もウェストミンスター寺院にあります。ダーウィンの『種の起源』は、日本でとても誤解されています。ダーウィンは元々、ケンブリッジの聖公会の神学生でした。ダーウィンの意図は、「種の起源は分からない」ということです。「ファラデーの法則」のファラデー、音楽家のヘンデル等、いろいろな聖公会に関わる文化人が聖公会のウェストミンスター寺院に葬られています。

聖公会は、聖書・伝統・理性を大事にする教会であると同時に、さ

まざまな社会との関わりを大切にしています。最初に申し上げたとおり、アイヌの人々や岡谷の女工さんなどとの関わりはその一例です。何故コーリー司祭が女工さんのために教会を建てようとしたのか。それは聖公会が国教会だったからです。町中の全住民がすなわち聖公会の教会の信徒なのです。教会の働きとして、全ての信徒への配慮をしなければなりません。国教会ですと全住民が全部信徒ですから、信徒への配慮というのは、すなわち地域全体への配慮となります。ですから、地域の住民にとって必要なことに対して、教会が責任を持つのです。教育が必要だと思ったら学校を建てますし、医療が必要でしたら病院を建てるわけです。社会福祉が大事だと判断されれば福祉施設を建てるのです。それは教会の「牧会的な」務めとして当然のごとく行うわけです。

これは植民地伝道として批判的にも捉える必要がありますが、大英帝国の広がりとともに、結果的に世界中に聖公会の教会が造られました。日本にもウィリアムズ主教が来て教会を造り、当然のこのように桃山や立教などの学校を造り、それから米国聖公会は病院（聖路加国際病院）を建てました。それは聖公会のまさに伝統として、社会的、公共的な働きを行って来た結果です。アパルトヘイトの撤廃運動でノーベル平和賞を受賞したデズモンド・ツツも南アフリカ聖公会の大主教です。現在のヨークの大主教ジョン・セントラムは、イラク戦争などに反対して、ヨークミンスターという大聖堂の中にテントを張ってハンストをしました。それも非常に聖公会らしい伝統なのです。これらすべてが「聖公会が大切にしてきたもの」なのです。

世界の聖公会のことを「アングリカン・コミュニオン」といっておられます。160か国、そして8,000万人の信徒がいます。8,000万人

というのは、9億人のローマカトリックに次いで大きな教会で、国連のNGOの代表権も持っております。聖公会は、神の正義や平和や命を証し続けていくと同時に、古代教会から時間を超えた繋がり、空間を超えた世界を大切にする教会であるといえます。

ですから、桃山学院につらなる皆さんは、実は、この、時間と空間を超えた結び目の中で、〈いま・ここ〉で学んでおられるのです。そんな、大学で、いま、皆さんは学んでおられるのだということに、ぜひとも誇りを持っていただきたいと思うのです。本日はご清聴ありがとうございました。



## 講師略歴



### アンブロージア 後藤 香織 (ごとう・かおり)

日本聖公会（英国教会）中部教区司祭。現在、名古屋聖ヨハネ教会牧師、愛知聖ルカ教会管理牧師。2003年10月、教職者の集いにおいて、MtFTG、つまり男性から女性へのトランスジェンダー（注1参照）であるとカミングアウト。その後、2005年11月にキリスト教会においてカミングアウトし、ホモフォビア（注2参照）の強いキリスト教会の中で、セクシュアル・マイノリティへの偏見を払拭する活動をしている。

（注1）トランスジェンダーとは、現在の日本において性同一性障害と称されるものに相当する。MtFTGとは“Male to Female Transgender”の頭文字で表した略称。

（注2）ホモフォビア（Homophobia）とは、同性愛、または同性愛者に対する恐怖感・嫌悪感・拒絶・偏見、または宗教的教義などに基づいて否定的な価値観を持つこと。



### 西原 廉太 (にしはら・れんた)

京都大学工学部で金属工学を研究した後、聖公会神学院、立教大学大学院を経て日本聖公会（英国教会）中部教区司祭に。現在、立教大学文学部教授、立教大学副総長、立教学院理事、聖公会神学院特任教員、WCC（世界教会協議会）中央委員、世界聖公会エキュメニカル関係常置委員、桜美林学園評議員、日本聖公会渉外主査を務める。主な著書は、『リチャード・フッカー―その神学と現代的意味』（聖公会出版）、『知の礎―原典で読むキリスト教』（共著：聖公会出版）、『総説キリスト教史3 近・現代篇』（共著：日本キリスト教団出版局）、『Other Voices, Other Worlds』（共著：Darton, Longman & Todd:London）、『聖公会が大切にしてきたもの』（聖公会出版）などがある。

# 出 会 い

— キリスト教講演会・講和集 (23) —

2013年3月発行

発 行 桃山学院大学キリスト教センター

〒594-1198 大阪府和泉市まなび野1番1号

TEL 0725-54-3131 FAX 0725-54-3210

印 刷 和泉出版印刷株式会社

〒594-0083 大阪府和泉市池上町四丁目2番21号

TEL 0725-45-2360 (代)





## 「桃山学院の学院章」

この学院章は、イエス・キリストの最初の弟子である聖アンデレ (St. Andrew) にちなんでデザインされている。「アンデレ・クロス」(X字型の十字架) は、イエスの教えを守り通して殉教したアンデレの偉大なる生涯のシンボルである。「<sup>セ</sup><sup>ク</sup><sup>イ</sup><sup>ミ</sup><sup>ニ</sup><sup>メ</sup>」(「我に従え」というラテン語) は、アンデレがイエスに出会った時に呼びかけられた言葉である。したがって学院章はアンデレのように最後まで「自由と愛」のキリスト教精神によって生きることを示している。

*St. Andrew's University*